

「名詞の形式化」に関する一考察 —「まま」の場合—

内丸裕佳子

キーワード：名詞の形式化、「まま ϕ 」と「で」「に」、
一般の名詞との共通点と相違点、帰属性の名詞、

0. はじめに

本稿では「名詞の形式化」といわれる現象の一つ、「まま」をとりあげ、この語が構文的にどのような特徴を持つかを考察する。「友達が靴をはいたままうちにあがった」「花子が風に誘われるまま旅に出た」の下線部において「まま」は連体修飾構造を持っているが、一方「うちにあがった」「旅に出た」という主文動詞に対しては「で・に」がなくても副詞的に係っているように見える。係り係られる関係のある一面において一般の名詞と同様に扱うことができるが、他の一面で一般の名詞と異なる働きを持つ語を「名詞の形式化」と呼ぶ。この「名詞の形式化」と呼ばれる語は、従来観念的に名詞として扱われることが多く、構文的に一般の名詞とどのような共通点・相違点を持つのか記述されてこなかった。そこで本稿では「名詞の形式化」とみなされている語の一つをとりあげ、これを構文的に名詞として扱うことの妥当性を確認する。

1 節では名詞の形式化に関する従来の研究を概観し、本稿での考察対象を明示する。2 節では「まま」の分布を記述し、3 節では「まま」と前接要素および後接要素との関係から、一般の名詞との構文的な共通性を観察する。4 節では3 節を基に「まま」の名詞としての意味を考える。

1. 名詞の形式化に関する従来の研究

1. 1. 形式名詞論

従来「形式名詞」は意味的に抽象的概念を表し、それ故、構文的に常に何らかの修飾部がなければ単独で使えないことが特徴とされていた。しかし、こうした意味的・構文的特徴づけには、抽象的な概念とは何なのか、補足成分の有無が名詞の抽象性の決定的規準にな

らないこと、「ところ、為、際」など後接要素に対して副詞的な機能を持っている語を名詞の中に組み入れる根拠がはっきりしないこと、といった3つの問題がある。

1. 2. 連体修飾構造と奥津(1974,1986)・寺村(1975,1977^{a,b},1978)の研究

上記3つの問題点、つまり名詞性の強弱、名詞の自立性の強弱といった構文的特徴と意味的特徴をどのように説明するかという疑問に対し、連体修飾構造つまり同一名詞連体修飾あるいは内の関係と、付加名詞連体修飾あるいは外の関係という構文的枠組みから考察し、説明を与えたのが奥津、寺村の研究である。

しかし名詞の構文的分布はこの二つだけにまとめられるのではなく、被修飾語の意味特性が連体関係の成立を強く要求するという、後者の連体修飾構造の程度が強まると同時に、一般の名詞とは少し異なった構文的振る舞いを見せるものが現れる。例えば、「家を出ようとしたところ電話が鳴った」の「ところ」は「家を出ようとした」という修飾部を強く要求すると共に、「電話が鳴った」に対して副詞的な働きを持っている。「家を出ようとした」の部分を前接要素と呼び、「電話が鳴った」の部分を後接要素と呼ぶことにすると、前接要素の面では名詞として扱うことができるが、後接要素の面では「で・に」を伴わずに副詞として機能する点で一般の名詞と同様に扱うには制約があるものだといえる。このように前接要素か後接要素のいずれかの面で他の名詞と変わるところはないが、他の一面で一般の名詞と同じに扱うのに制約が現れる場合を寺村は「名詞の形式化」と呼んでいる。奥津は後接要素の面で副詞性を持ち、一般の名詞として扱うには制約があるものを、いわゆる接続助詞と共に「形式副詞」と呼んでいる。本稿では前接要素と後接要素の両面の名詞性に注目していくことから、寺村の「名詞の形式化」という用語を借りることにする。

さてこの「名詞の形式化」だが、寺村はいくつかのテストから、前接要素との関係において名詞性を持ち、後接要素との関係において副詞性を持つ語の例として(1)を挙げている¹。

- (1) 時、 間、 頃、 度、 場合、 ため、 ゆえ、 末、 あげく、 うえ、
あまり、 ところ、 くらい、 まま、 とおり、 結果、 かぎり、

しかし、前接要素あるいは後接要素の面で他の名詞と変わらず、他の一面で一般の名詞より制約を受けるという「名詞の形式化」現象について、それらの語の持つ本来の意味は何か、その本来の意味と構文とがどのような関係を持つのか、という体系的な記述は寺村、奥津、そしてそれ以後の他の研究においても明示的ではない。そこで本稿では、「名詞の形式化」の一つである、前接要素が名詞的で、後接要素が副詞的な働きを持つ語について

記述を試みようと思う。その始めとして、上記(1)の中の前接要素において名詞性を残し、後接要素に対して形態的に「で・に」が表示されなくても主文動詞に対して副詞的に係っているように見える「まま」をとりあげ、考察していくことにする。

1. 3. 本稿の考察対象

前接要素との関係が名詞的で、後接要素との関係が副詞的である語、「まま」について以下の4点を記述する。

- ①前接要素の面でどれだけ名詞性を残し、後接要素の面でどれだけ特殊性を示しているのか、「まま」の分布を観察する
- ②「まま」の持つ本来の意味は何か
- ③前接要素・後接要素との共起制限と「まま」の本来の意味とがどのような関係にあるか
- ④一般の名詞との共通点・相違点は何か

2. 前接要素または後接要素と「まま」の分布

2. 1. 前接要素と「まま」

(2a-f)の前接要素との対応は、一般の名詞と変わらない。「まま」は前接要素との対応において、名詞性を多分に残しているといえる。

- | | | |
|--------------------|-------------------|-----------------|
| (2) a. <u>そのまま</u> | b. <u>素顔のまま</u> . | c. <u>小さいまま</u> |
| d. <u>未熟なまま</u> | e. <u>言われるまま</u> | f. <u>立ったまま</u> |

2. 2. 後接要素と「まま」

(3a-e)で、「から」を除いた「が、を、の、に、で」と対応する点、一般の名詞と変わらない。しかし、「まま」には一般の名詞と異なるところが二つある。一つは「を」格と対応しているも、(4b)のように「まま」節を取り出して連体修飾構造の被修飾語の位置におくのが困難なことである。これは「まま」自体が持つ意味と、(5)のように「ままを」が「ままに」と置き換えられる例があることに起因しているかもしれない²。その点で「ままを」は「を」が後接していても一般の名詞とは異なるものである。

- (3) a. 素顔のまがいい
- b. 太郎が花子に友達から聞いたまを話した
- c. 3個分の梅肉と長いまのあさつきを芯にして巻いた

- d. 太郎は立ったままで花子の話を聞いた
- e. 太郎は親からすすめられるままに結婚した
- (4) a. 太郎が花子に友達から聞いたままを話した
- b. ?太郎が花子に話した友達から聞いたままがあつという間に他の友人に広まった
- (5) a. 太郎が花子に友達から聞いたままを話した
- b. 太郎が(事件のことを)花子に友達から聞いたままに話した

一般の名詞と異なる二つ目の特徴は、(6)「ままφ」の形で副詞的に機能することである。形態的には「φ」だが、実際の解釈では(7)のように「で」あるいは「に」のどちらか一方を補っている。形態的に「φ」という点は一般の名詞と異なるが、「で・に」を補う解釈という点では一般の名詞と変わらない。よって以下「ままφ」のものは「まま(で)」「まま(に)」で表すことにする。

- (6) a. 友達が靴をはいたままうちにあがった
- b. 花子が風に誘われるまま旅にでた
- (7) a. 友達が靴をはいたままで(*ままに)うちにあがった
- b. 花子が風に誘われるままに(*ままで)旅に出た

3. 「まま」と前接要素および後接要素との関係

本節では次の2つをねらいとする。まず、「まま(で)」「まま(に)」の前接・後接要素にどのような共起制限があり、この共起制限が一般の名詞とどの程度共通しているのか。この共通性から「まま」を名詞とみなす根拠について考察していくことである。次に、一般の名詞との構文的な共通点と相違点から「まま」の本来の意味を考えることである。

3. 1. 「まま(で)」の場合

「まま(で)」の「で」は(8)(9)「～の時、～だった」と置き換えられることから、「だ」の連用形だと考えることができる。

- (8) a. 花子が立ったまま(で)コーヒーを飲んだ
- b. 花子がコーヒーを飲んだ時、花子は立ったままだった
- (9) a. 花子が魚を生きたまま(で)運んだ
- b. 花子が魚を運んだ時、魚は生きたままだった

3. 1. 1. 前接要素との共起制限

前接要素との共起制限は次の2つがある。まず、「まま(で)」節全体が常に主文の主語あるいは目的語の状態のどちらかを表しており、二重目的語の場合、目的語の状態記述は直接目的語に限られる、という制限である。

- (10) a. 花子が帽子をかぶったまま(で)部屋に入った
b. 花子が部屋に入った時、花子は帽子をかぶったままだった
- (11) a. 花子が春雨を乾いたまま(で)鍋に入れた
b. 花子が春雨を鍋に入れた時、春雨は乾いたままだった
- (12) a. 春子が赤ちゃん_iを裸のまま_i(で)夏子に預けた
b. *春子が赤ちゃんを裸のまま_i(で)夏子_iに預けた
- (13) a. 春子がお金_iを裸のまま_i(で)夏子に(から)もらった
b. *春子がお金を裸のまま_i(で)夏子_iに(から)もらった

次に、「まま(で)」の前接要素が状態を表すものなら何でも共起できるわけではない、という制限である。前接要素が形容詞と動詞の場合を観察すると、人・ものに固有の永続的な性質³を表す形容詞では、(14)のように主語あるいは目的語の状態記述文は不成立になる。一方、ある限られた時間・空間において人・ものが一時的・偶発的に獲得する性質⁴を持つ形容詞では、(15)のように主文の主語あるいは目的語の状態記述が可能になる。

- (14) a. *花子が背の高いまま(で)車に乗った
b. *花子が犬を賢いまま(で)買った
- (15) a. 太郎が髪の毛の長いまま(で)面接写真を撮った
b. 花子が日本酒を冷たいまま(で)飲んだ

「まま(で)」の前接要素が動詞の場合も同様で、人・ものに固有の永続的な性質を表す動詞(そびえる、似ている、優れている、話せる等)は「まま(で)」とは共起しない。前接要素として共起しやすい動詞は位置変化動詞、状態変化動詞で、用例を見ても「位置変化動詞/状態変化動詞+たまま(で)」の形が多い⁵。動詞の夕形は、主文の主語あるいは目的語の位置または状態が変化した後の結果の持続を表している。

- (16) a. 花子が胸に名札を付けたまま(で)会場を出た
b. 花子が髪を濡らしたまま(で)銭湯から家へ帰った
c. 花子がわかめをざるに入れたまま(で)熱湯にくぐらせた
d. 花子がおもちゃを壊したまま(で)太郎に返した

「まま」の分布について、「まま(で)」節の名詞性を示す例として「ガ・ノ可変」を挙げておく。

- (17) a. 太郎が 髪が/髪の 長いまま(で)面接写真を撮った
b. 花子が里芋を 土が/土の ついたまま(で)保存した

3. 1. 2. 後接要素との共起制限

「まま(で)」節は(18)のように状態動詞、活動動詞、位置変化動詞、状態変化動詞のすべての主文動詞と共起可能である。しかし、「まま(で)」節で表される状態は主文動詞の動作・作用と同じところに何らかのつながりを持っていなければならないという意味的制約がある。そのため、(18e)のように意味的に主文動詞の動作・作用と同じところに何らかのつながりがない場合、非文になる。

- (18) a. 花子が黙ったまま(で)そこにいた
b. 花子がりんごを皮がついたまま(で)かじった
c. 花子がえびを生きたまま(で)鍋の中に入れた
d. 花子がねぎを長いまま(で)洗った
e. *花子がねぎを土をつけたまま(で)洗った

前節で二重目的語の場合、「まま(で)」が直接目的語に対して指向性を持つことを見た。そして、本節では「まま(で)」節の後接要素が状態動詞、活動動詞、位置変化動詞、状態変化動詞のあらゆる主文動詞と共起できることを見た。これらから、「まま(で)」は主文動詞の主語・目的語といった文中の主要な項と結びつき、主文の動作・作用が起こる際の主語・目的語の状態を記述する機能を持っている、とまとめることができる。

3. 1. 3. 一般の名詞との共通点と相違点

「まま(で)」が主文動詞の主語・目的語と結びつき、主文の動作・作用が起こる際の主語・目的語の状態を表すという機能は、「まま」に特有の機能なのか、それとも「一般の名詞+で」にも見られる機能なのだろうか。本節では主語・目的語の状態記述という機能を担うのは何なのかを確かめ、一般の名詞との共通点を見ていくと共に、一般の名詞との相違点から「まま」の意味特性について考えることにする。

まず、主語・目的語の状態記述という機能だが、これは「一般の名詞+で」にも見られる機能である。(10)～(15)の記述は「一般の名詞+で」にもあてはまる。ここから、この機能

を担うのは「で」であることがわかる。

- (19) a. 花子が 立った状態(姿勢)で/立ったまま(で) コーヒーを飲んだ
b. 花子が魚を 生で/生の状態で/生のまま(で) 運んだ
- (20) a. 春子が 赤ちゃん_iを 裸_iで/裸の状態で/裸のまま_i(で) 夏子に預けた
b. *春子が赤ちゃんを 裸_iで/裸の状態で/裸のまま_i(で) 夏子_iに預けた
- (21) a. 太郎が 長髪で/長い髪の状態で/長髪姿で/髪の長いまま(で) 面接写真を撮った
b. 花子が日本酒を 冷で/冷たい状態で/冷たいまま(で) 飲んだ
c. *花子が犬を 天才で/賢い状態で/賢いまま(で) 買った
d. *花子が のっばで/背の高い状態(姿)で/背の高いまま(で) 車に乗った

次に、「コレガ _____ 夕」の下線部に挿入可能な独立性の高い名詞と「まま(で)」とを比べてみると、両者の違いは主文動詞が状態変化動詞の場合と、活動を表す他動詞の場合に現れる。(22)の主文動詞は位置変化動詞、(23)(24)は状態変化動詞、(25)(26)は活動の他動詞である。(23)~(26)では「生」「裸」という独立性の高い名詞を使うと許容度が落ちるが、外の関係あるいは付加名詞連体修飾に含まれる「状態、姿」などは、「まま」と共に目的語の状態を表すことが可能になる。

- (22) a. 春子が犯人_iを留置所から自宅まで 裸で/裸のまま_i(で) 逃がした
b. 花子が赤ちゃん_iを 裸で/裸のまま_i(で) 乳母車に乗せた
- (23) a. 花子が魚を 生のまま(で)/生の状態で 焼いた
b. *花子が魚を 生で 焼いた (焼いた結果まだ魚が生であるという判断)
- (24) a. 太郎が次郎_iを 裸のまま_i(で)/裸の状態で/裸姿_iで 殺した
b. ?太郎が次郎_iを 裸_iで 殺した
- (25) a. 太郎が次郎_iを 裸のまま_i(で)/裸の状態で/裸姿_iで 殴った
b. *太郎が次郎_iを 裸_iで 殴った
- (26) a. 太郎が次郎_iを 裸のまま_i(で)/裸の状態で/裸姿_iで 叱った
b. *太郎が次郎_iを 裸_iで 叱った

主文動詞が状態変化動詞・活動を表す他動詞の場合、どうして「まま、状態+で」のような名詞句にすると許容度が上がるのか。これは「まま、状態」という語そのものが持っている意味が影響するためだと考える。「まま(で)」の前接要素には「人・ものが偶発的・一時的に獲得する性質」という意味的制約があることを(14)(15)で見た。前接要素が動詞の場合、ほとんどが位置変化動詞あるいは状態変化動詞で、「結果の持続」を表していた。この「結果

の持続」および「一時的な性質の持続」という前接要素の意味的制約と、主文動詞と「まま(で)」節とが時間的に同じところを占めるという後接要素の意味的制約とが強く働いて、(23)～(26)の許容度を上げていけると考えることができる。例えば、「まま、状態」という名詞がなくても、「-つき、-入り、-重ね、-はさみ、-詰め、-抜き」といった状態変化動詞の名詞形(結果の持続を表す名詞)と主文の状態変化動詞とは共起可能である。ここから「ある状態の維持」という意味が「まま」にあると考えるのである。

- (27) a. 花子が芋を 皮つきで/皮つきのままで/皮がついたままで 煮た/揚げた/焼いた
b. 花子がクッキーの生地を 二段重ねで/二段重ねのままで/二段重ねたまま 焼いた
c. 花子がピーマンを 肉詰めで/肉詰めのままで/肉を詰めたままで 揚げた

以上の観察から、「まま」の意味は「状態、姿、さま」などのあり様を表す一般の名詞と共通に扱うことができ、前接・後接要素の制限から「まま」が「一時的・偶発的に獲得されたある状態の維持」という意味を強く持っていることが考えられる。

3. 2. 「まま(に)」の場合

「まま(に)」の「に」も(28)(29)のように、「～の時、～だった」で置き換えられることから、「だ」の連用形だと考えられるが、「まま(で)」と「まま(に)」の修飾機能は異なっている。「まま(で)」節は主文の主語・目的語の状態を表すが、「まま(に)」節は主文の動作・作用のあり方を述べている。

- (28) a. 旗が風の吹くまま(に)はためいた
b. 旗がはためいた時、旗のはためき方は風の吹くままだった
(29) a. 学生が文型を先生に教えられたまま(に)覚えた
b. 学生が文型を覚えた時、文型の覚え方は先生に教えられたままだった
(30) a. 花子が靴をはいたまま(で)うちにあがった
b. 花子がうちにあがった時、花子は靴をはいたままだった
c. *花子がうちにあがった時、うちのあがり方は靴をはいたままだった
(31) a. 花子が魚を生きたまま(で)運んだ
b. 花子が魚を運んだ時、魚は生きたままだった
c. *花子が魚を運んだ時、魚の運び方は生きたままだった

「まま(に)」が「ままを」と置き換え可能な場合、「まま(に)」は「とおりに(に)・ように」と置き換えられることが多いが、「まま(で)」はできない。このことから、「まま(で)・まま(に)」

が文中で異なる機能を持っていることがわかる。

- (32) a. 学生が文型を先生に教えられたまま(に)覚えた
b. 文型は先生に教えられたままを覚えた
c. 学生が文型を教えられたとおり(に) (ように) 覚えた
- (33) a. 花子は里芋を土がついたまま(で)むいた
b. ?里芋は土がついたままをむいた
c. *花子が里芋を土がついたとおり(に)(ように)むいた

3. 2. 1. 前接要素との共起制限

「まま(に)」の前接要素も、人・ものが獲得した一時的・偶発的な状態を表すが、前接要素が動詞の場合、タ形だけでなくル形も現れるという点で「まま(で)」との異なりを見せる。また形態的な違いだけでなく、意味的にも違いがある。「まま(に)」節の動詞のル形・タ形は、前接要素のことがらが主文動詞の動作・作用より前に行われたという意味なら(34a)のようにタ形になり、同時であるという意味なら(34b)のようにル形が使われる。このル形・タ形の解釈の違いと、主語・目的語の状態を表すか、動作・作用のあり方を表すかという違いは、(35)によっても示すことができる。

- (34) a. 花子が被害状況を見てきたまま(に)報告した
b. 花子が小さい時の記憶を思い出すまま(に)話した
- (35) a. このカーナビが車の走っているままを映し出した
b. このカーナビが車の走っているままに画面を映し出した
c. *このカーナビが車の走っているままで画面を映し出した

「まま(に)」の前接要素は主文動詞の動作・作用のあり方を具体的に述べている。動作・作用がどんなあり様かを詳述するのは「まま」だけではできないので、その具体的内容を「まま」が前接要素に強く要求することになる。

「まま」の名詞性は2. 1. 節の分布で示したが、もう一つ、「まま(に)」節の「ガ・ノ可変」を挙げておく。

- (36) a. 学生が文型を 先生が/先生の 教えたまま(に)覚えた
b. 花子が感想を 筆が/筆の 赴くまま(に)書き綴った
c. 花子が 音楽が/音楽の 聞こえてくるまま(に)身をまかせた

3. 2. 2. 後接要素との共起制限

「まま(に)」節は(34)のように主文動詞に対して相対的な時間関係を示しており、後接要素との対応では(37)のとおり、活動動詞、位置変化動詞、状態変化動詞、状態動詞、すべての動詞と共起可能である。この点では「まま(で)」と変わらないように見える。しかし、主文動詞のアスペクトとの対応を観察すると、「まま(に)」には次のような特徴がある。

- (37) a. 花子が今年中にすべきことを思いつくまま(に)考えた
b. 花子が映画で見たまま(に)太郎を殴った
c. 花子が風に誘われるまま(に)東北方面まで遠出をした
d. 下町の人々が浅草に伝統行事を昔のまま(に)再現した
e. 花子が親に言われるまま(に)そこにいた

(28)(29)で「まま(に)」が主文動詞の動作・作用のあり方を表していると述べた。(37a-c)では「まま(に)」が主文動詞の動作の継続を表すアスペクトと対応しており、その対応に合わせて「考え方」「殴り方」「遠出の仕方」がどんなあり様なのかが「まま(に)」節で記述される形になっている。一方(37d)は変化の結果ともいえるが、場所の「に」格が現れることから、(37d-e)をまとめて、「まま(に)」節が、存在の仕方がどんなあり様かを記述している、といえる。つまり、「まま(に)」は動作・作用の継続を表す主文動詞のアスペクトと対応し、「まま(に)」節がその動作・作用のあり様を詳述していることになる。

「まま(で)」は(18)のように状態動詞、活動動詞、位置変化動詞、状態変化動詞と共起すると同時に、アスペクトとの対応にも制限はみられない。しかし「まま(に)」は主文動詞のアスペクトとの対応において「まま(で)」との違いが現れる。

3. 2. 3. 一般の名詞との共通点と相違点

主文の動作・作用のあり方を表すという機能と、主文動詞の動作・作用の継続を表すアスペクトと対応するという機能は「まま(に)」に特有の機能ではない。この機能を担うのは「に」である。(38)の様態の副詞、(40)の結果の副詞の「に」と、(37a-d)の「に」は機能が同じである。

- (38) a. 丁寧に洗った 足早に歩いた 上下に揺れた 熱心に読んだ
b. 丁寧な洗い 足早の歩き 上下の揺れ 熱心な読み
(動作の継続を表す動詞の名詞化形との対応)

- (39) a. 思いつくまま(に)考えた / 映画で見たまま(に)殴った / 風に誘われるまま

(に)遠出をした

- b. 思いつくままの考え / 映画で見たままの殴り / 風に誘われるままの遠出
- (40) a. 両親が息子を医者に育てた / 太郎が花子を幹部候補生に推薦した
- b. 花子が皿を粉々に割った / 花子が爪を真っ赤に塗った
- c. 下町の人々が浅草に伝統行事を昔のまま(に)再現した

上記のように「まま(に)」が、様態の副詞あるいは結果の副詞として機能する時に現れる「に」と同じ機能を持つことと、形態的に「まま ϕ 」でもその解釈は常に「に」を補っていることから、「まま」の名詞性を示すことができる。また、「まま(に)」の前接・後接要素の制限は「に」によるものだともいえる。一般の名詞と異なるのは、「一般の名詞+に」が様態の副詞の機能を持ちにくいことである。(38)の機能は、いわゆる形容動詞に多く現れる。この一般の名詞との相違点から「まま」には「状態性」という意味特性が強いことがうかがえる。

3. 3. 「まま(で)」と「まま(に)」どちらの解釈も可能なもの

下記の例は「まま(で)・まま(に)」、どちらの解釈も可能なものである。

- (41) a. 軍事衝突の危機をはらんだ呪み合いが疑問が解決されないまま(で・に)続いた
- b. 花子が他人の話をそのまま(で・に)信じた

「まま」節の前接要素が動詞の場合、形態的にル形/タ形が現れるか否か、意味的にタ形が過去/結果持続と解釈されるか否かで「まま(で)・まま(に)」の判断ができる。しかし前接要素が形容詞あるいは名詞の場合、形態的にも意味的にも「まま(で)・まま(に)」の判断が難しくなることがこの二義性の一つの理由である。もう一つの理由は主文との修飾関係で、主文の主語・目的語の状態を修飾するのか、主文動詞の動作・作用のあり方を修飾するのか、という選択があるからだと考えられる。「まま(で)・まま(に)」の解釈の重なり合いは、「まま」という語の単一の意味が「で」あるいは「に」の構文的機能の影響を受け、意味の派生を起していると考えられる傍証になると同時に、「まま」を構文的に名詞として位置づける根拠になると考えられる。

4. 「まま」の意味と帰属性の名詞について

「まま」が形態上「まま ϕ 」になり接続助詞化しているように見えても、その解釈は常に「で」または「に」を伴うものであった。そして前接・後接要素の制限も「一般の名詞+で・に」と共通しており、構文的に「まま ϕ 」に見られる制約は「で」「に」によるもので、「まま」を名

詞とみなす妥当性が3節で確かめられた。「ままゆ」について、接続助詞と同様に扱ったり、「まま」に二義あるとみなす研究もあるが、「まま」は構文的に名詞であり、かつ何か名詞的な本来の意味があって、それが「で・に」と常に結びつくことによって構文的異なりを見せると考えた方がいいだろう。では「まま」の持つ意味とは何なのか。今までの考察をまとめると以下のようなになる。

- ①「まま(で)」の構文的働きが「状態、姿、さま」などの語と共通しており、主文動詞の動作・作用が起こる際の主語あるいは目的語の状態を表していること。
- ②「まま(に)」の構文的働きが「通り、様に」といった語、あるいは形容動詞と共通しており、主文動詞の動作・作用が起こる際の一時的・偶発的な動き・作用の「様子、あり様」を表していること。
- ③「まま(で)・まま(に)」ともに何かに帰属する状態、何かに対する全体・部分の関係を表していること。

花子が <u>立ったまま</u> でコーヒーを飲む	→	花子に属する一時的な状態
花子が魚を <u>生きたまま</u> で運ぶ	→	魚に属する一時的な状態
旗が <u>風の吹くまま</u> にはためく	→	旗の動きに属する状態
伝統行事を <u>昔のまま</u> に再現した	→	伝統行事の再現の結果に属する状態

これらから、「まま」には「ある状態の維持」という意味があり、この本来的な意味と、「で」または「に」が結びつくことにより、付加名詞連体修飾の中の部分的同格連体名詞、あるいは外の関係の帰属性を表す名詞と構文的に共通した働きを見せたり、形容動詞に近い働きを見せたりするといえる。

5. おわりに

「まま」の記述について次のようにまとめることができる。

- ①前接要素の面でどれだけ名詞性を残し、後接要素の面でどれだけ特殊性を示しているか
→前接要素との対応は2.1.節(2)で見たように、名詞性を多分に残している。後接要素との対応は、「ままを」の場合、連体修飾構造がとりにくいこと、「ままに(ままで)」との置き換えが見られることが特殊である。主文動詞に副詞的に係る場合、形態的に「ままゆ」の形がとれることが特異である。しかし構文機能では常に「で」あるいは「に」を補っており、この点では一般の名詞と変わらない。「まま(で)・まま(に)」の場合、その前接・後接要素の制限も「一般の名詞+で・に」とほぼ共通の要素が見出され、これらの制限が「で」「に」

に基づくものであることがわかった。

②「まま」の持つ本来の意味は何か

→ある状態の維持という意味があり、この状態は何かに帰属するもの、何かに対する全体・部分の関係を内包している。

③前接要素および後接要素との共起制限が「まま」の本来の意味とどのような関係にあるか
→「まま」には②の意味があるが、「まま」だけでは独立性が弱く、そのため、この状態の具体的内容を前接要素に強く要求する。「ままφ」で副詞的に働く場合、その前接・後接要素の制限は「で」「に」の影響を受ける。「まま(で)」節は、付加名詞連体修飾あるいは外の関係における帰属性を表す名詞(状態、姿、さま、etc.)とその構文機能を同じくする。「まま(に)」節では形容動詞の働きと共通点がある。

④一般の名詞との共通点・相違点は何か

→①で述べたように、「まま」は前接・後接要素との共起関係が一般の名詞と多くの点で共通している。相違点は形態的に「ままφ」で副詞的に機能する点と、「ままを」の「を」格が補語ではなく副詞的に機能する点である。

以上のことから、山田、松下らが直感的に名詞だと感じた語の一つ、「まま」を構文的な根拠を示して名詞であることを裏付けた。また寺村が(1)のような語を接続助詞と同様に扱わず、名詞としたことの妥当性も確かめる1つのステップになったと考える。しかし、本稿は「名詞の形式化」に関する一考察であって、「名詞の形式化」全体を捉えるには不十分である。例えば(32c)の「ように」は、様態の意味を表す場合は「に」が必須であるが、結果・目的・引用を表す場合、「に」は任意である。こうした語の形態・意味・構文が名詞性という問題とどう関係しているのかなど考えていかねばならない。個々の語を観察していきながら、「名詞の形式化」といわれるものが一般の名詞とどんな共通点・相違点を持つのか構文的に体系化する必要がある。

【参考文献】

奥津敬一郎(1974) 『生成日本文法論』大修館書店。

————— (1986) 「形式副詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』

29-104. 凡人社。

- 加賀信広(1996) 「状態変化の主体と受益構文」原口庄輔・鈴木英一(編)『文法と言語理論』75-85.
筑波大学現代語・現代文化学系.
- (1997) 「叙述形容詞の三分類-特性記述、状態記述、状況記述-」原口庄輔(編)『文法と言語理論2』11-20. 筑波大学現代語・現代文化学系.
- (1998) 「目的語にかかる描写の二次述語」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書平成9年度I』427-432. 筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織.
- 影山太郎(1996) 『動詞意味論』くろしお出版.
- 神尾昭雄(1980) 「「に」と「で」-日本語における空間的位置の表現」『言語』9, 55-63. 大修館書店
- 久池井紀子(1995) 「「まま」の機能と下位分類-主文と従属文の関係を中心に-」『紀要』18, 45-62. 国際学友会.
- 寺村秀夫(1975/1977^{a,b}/1978) 「連体修飾のシンタクスと意味-その1~その4-」『日本語・日本文化』4-7, 大阪外国語大学. (『寺村秀夫論文集I』(くろしお出版, 1992)に再録)
- 仁田義雄(1983) 「結果の副詞とその周辺-語彙論的統語論の姿勢から-」渡辺実(編)『副用語の研究』117-136. 明治書院.
- 松下大三郎(1928) 『改撰標準日本文法』紀元社. (中文館書店1930, 復刊 勉誠社1977)
- 三宅和宏(1995) 「~ナガラと~タママと~テ-付帯状況の表現-」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』441-450. くろしお出版
- 矢沢真人(1987) 「連用修飾成分による他動詞文の両義性-状態規定の「~デ」と他動詞文修飾構成について-」『国語国文論集』16, 68-86. 学習院女子短期大学.
- 山田孝雄(1908) 『日本文法論』宝文館

【注】

- ¹名詞性・名詞の自立性の強弱には程度差があり、例のようにはっきり語類としてまとめられるものではない。前接要素、後接要素のテストは寺村(1992:303)参照
- ²「まます」は「まますに」か「まますで」と対応する。しかし、「まますで」との対応は許容度が落ちるようである。
花子が服を濡れたまますで着た ←→ ?花子が濡れたまますを着た / ?服は濡れたまますを着た
花子が魚を生をまますで運んだ ←→ ?花子が生をまますを運んだ / ?魚は生をまますを運んだ
- ³Individual-level predicate あるいは加賀(1997)の特性記述形容詞
- ⁴Stage-level predicate あるいは加賀(1997)の状態記述形容詞
- ⁵位置変化動詞、状態変化動詞以外に「活動動詞+たまます(で)」と共起することもあるが、用例は少ない。
(例) 花子が「今日は」と言っただまます(で)黙っていた / 花子が挨拶に答えたまます(で)一瞬立ち止まった
また常に「たまます(で)」の形をとるわけではなく、前接要素の動詞が受身の場合、「るまます(で)」もあり得る。この場合、主文動詞の動作・作用より前に行われたという意味なら夕形、同時であるという意味ならル形になる。
(例) 太郎はぶたれるまます(で)打ち返さなかった / 太郎はぶたれたまます(で)打ち返さなかった